

イースター礼拝 2024年3月31日(日)

題 『勝利者イエス』

テキスト：ヨハネによる福音書20章1～10節

イースターおめでとうございます！ ハッピーイースター！

皆さまの上に、つながるご家族の上に、地域の方々、世界中で戦争や自然災害で苦難の中を過ごしておられる人たちの上に、主の平和と生きる希望が与えられますようにお祈り致します。

さて、イースターになると瞬きの詩人と呼ばれた水野源三さんの「こんな美しい朝に」という詩を思い出します。

☆こんな美しい朝に☆

空には 夜明けとともに 雲雀（ひばり）がなきだし
野辺には つゆに濡れて すみれが咲き匂う

こんな美しい朝に こんな美しい朝に

主イエス様は 墓の中から
出てこられたのだろう

復活されたイエスは、まずマグダラのマリアにご自身を現わされました。このマグダラのマリアはかつていくつもの重い病気にかかり、そこでイエスに出会い、病を癒されたことがあったのです。その時から、イエスに従って生活していたのです。先週学びましたように、イエスが十字架につけられた時にもそばにいましたし、イエスの遺体が墓に葬られる時にも、その場所を見届けていました。「週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。」と1節にはあります。せめてイエスの遺体に香油を塗って、丁寧に別れをしたいと思ったのではないのでしょうか。イエスの遺体が収められた洞窟のような墓の入り口には大きな石があったのです。

聖書によれば、マリアが心配と不安の中で墓について見ると、墓から石が取りのけてあったのです。わたしたちも、人生のどこかで、日常の生活の中で自分ではどうすることもできない苦難の陥り、夜も眠れない、その重荷に苦しむ

こともあるのではないのでしょうか？　そういう私も以前お話しましたが、牧師の生活の中で、洲本教会に来る前にそのような体験をした一人です。苦悩の大きな石に心が潰されいるような状態です。

この時、おどろいたマリアは「主が墓から取り去られました」と弟子たちの所に帰って報告しています。この時、マリアは誰かがイエスの身体を取り去った、と思ったのです。マリアの気持ちはどうだったのでしょうか。十字架で愛するイエスを失い、今またそのなきがらまで、だれかによって奪い去られたかもしれない。マリアにしてみれば、イエスが死んだ時、自分も一緒に死んだようなものです。人は、かけがえのない人や仕事や、活動を失った時、自分自身も死んでしまったような気持ちを持つのではないのでしょうか。

死は人生の厳しい現実です。死はすべての関係を破壊します。昔から死は関係の喪失状態であるとも言われます。しかし、イエスの十字架と復活は、死を貫いて、なお人を活かす力があるのだということ、神の愛の力があることを語りかけてくれます。わたしたちも例外ではなく、イエスの十字架と復活の出来事を受け入れる時、キリストにつながることによって、その闇の中で光を見ているような体験ができるのではないだろうかと思うのです。復活体験は聖書でいう「永遠のいのち」に包まれる体験だと思います。永遠の命とは、いくら言葉で説明しても理解できることではないように思えます。しかし頭で理解することは難しくても、神の力と言われる聖霊の力を受けて心がイエス・キリストにつながる者は、すでに永遠の命につながっているのだとわたしは信じます。地上にあって、すでに神の命に預かり、永遠の生命の道を歩み出しているのだということです。

今日の聖書の個所の後に記されているマグダラのマリアの復活のイエスとの出会いの場面を見ますと、11節には「マリアは墓の外に立って泣いていた。泣きながら身をかがめて墓の中を見ると」とあります。

墓の前で、泣き崩れ、もう立ち上がることもできない程の悲しみを経験したマリアがそこにいます。しかし、ここで、悲しみのどん底で、マリアは復活のイエスに出会ったのです。みなさん、ここにいるわたしたちも復活のイエスに出会うことができるのです。それはまず聖書の言葉との出会いを通してです。限りない慈愛の神、同時に悪・罪に対しては厳しい神さま聖霊が生きて働いておられることを、私たちは聖書のことばを通して分かります。神さまはそうようにしてくださっているのです。聖アウグスティヌスは、青年時代にふしだらな生活から抜け出せなかった時、「取りて、読め、取りて、読め、」との声を聞いて、読んだ聖書のことばによって、生きて働かれる神を知り、悪と罪に支配

された自分を自覚したのです。そこに悔い改めが起こりかれが新たに生きる者となったのです。心のスタートは、人間何歳からでもできるのです。年老いてからでも可能なのです。全能なる愛なる神さまが爽やかな清々しい心を与え続けてくださるのです。

マリアは、自分の大切なイエスがどこかに連れ去られてしまった、イエスは自分を置いてどこか遠くに行ってしまった、と悲嘆にくれ、ひたすらイエスを探し求めます。イエスはどこかに行ってしまった、一体どこに行ってしまったのか、と。

その時、誰かの気配がし、ふりかえってみるとイエスがそこにいたのです。でもマリアにはすぐにはイエスだとは分からなかったのです。マリアはイエスを墓地の管理人、園丁だと思ったのです。園丁は「婦人よ。なぜ泣いているのか。だれを探しているのか。」と尋ねます。マリアは、「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。」と答えます。

すると、管理人は「マリア」と呼びかけます。よく聞いた声、懐かしい声でした。マリアは振り向いて「先生」と答えます。園丁だと思ったら、イエスだったのです。

自分を置いてどこか遠くに行ってしまったと思ったら、大切な人は、実はすぐ近くにいたのです。みなさん、大切な人は、すぐ近くにいるのです。神は皆さんのすぐ近くに、共におられるのです。イエスは死んでしまったと思ったら、じつは、生きていたのです。マリアは、死は終わり・ピリオド、エンドではなく、死を越えた永遠のいのちがあること、死はコンマであることを知ったのです。死を超える神の愛、全き愛を知ったのです。イエスは死に勝利されたのです。イエスに出会ったマリアも、この世の絶望に勝利したと言えるのです。

主イエスは私たちのために命を捨てて下さいました。復活は遠い昔の事というだけではなく、私たちの日常生活の中で、来る朝ごとに起こる出来事なのだと信じます。これから先、わたしたち朝、目覚める場所はそれぞれ違って行くかもしれません。でもその場所で、夜には、神さまに与えられた一日一日を感謝して身を横たえて眠りにつき、また朝を迎えることを心に覚え、暗い夜も夜中もずっと主が支えていてくださっていることを信頼し感謝し眠りにつきたいと思います。そして、さわやかな朝を迎えましょう。

「空には 夜明けとともに 雲雀（ひばり）がなきだし
野辺には つゆに濡れて すみれが咲き匂う

こんな美しい朝に　こんな美しい朝に

主イエス様は　墓の中から

出てこられたのだろう」

皆さまの上に、主の平安をお祈りいたします。黙想しましょう。